

ロボット刑事 (1973)

メディア TV

ジャンル 特撮 アクション ロボット

製作国 日本

色彩 Color

1973/04/05 ~ 1973/09/27

TV放映

木曜日

19:00~19:30

フジテレビ

【解説】

アイザック・アシモフ著「鋼鉄都市」を読んでいたなら少し違った感想を抱いたかもしれないが、放映当時の子供たちが読んでいるはずもなく、この無表情なヒーローは大歓迎された。ロボットを悪人にレンタルし、普通ではありえない犯罪を現出させる組織バドー。通常の警察組織での解決は到底望めない。その頃、警視庁に新任刑事としてロボットの“K”が配属された。Kはベテラン刑事の芝とともに、バドーの繰り出す殺人セールスマンと闘っていく。

本作品には『仮面ライダー』の滝和也役で人気沸騰の千葉治郎が、新條刑事として出演。無表情で、ともすれば取っつきにくい印象になりかねないロボットのヒーローをフォローしている。更にKのオーバーホールを行うための巨大ロボット“マザー”の存在は、等身大ヒーロー物である本作に、スケール感を与えている。マザーが戦闘でも活躍すれば、番組はかなり異なるテイストになっただろうが、残念ながらマザーは海辺にたたずむばかりで、やがて爆死してしまう。

Kはロボットだが服を着て行動する。それは戦闘マシンとして出撃するのではなく、芝刑事と共に捜査をするのがKの役割だからだ。また『流星人間ゾーン』のマイティライナーや『イナズマン』のライジンゴと、空飛ぶクルマが続々登場する中で、フェアレディZをベースとしながらも野暮ったいほど堅いデザインのジョーカーは、確かに“パトカー”であることを実感させる。あくまで刑事であるKは過度の戦闘能力を備えることもなく、武器といえば胸を開いて発射する電磁ショットだけである。

しかし物語の終盤に至り、さしものKもパワーアップする。戦闘時には体色が赤く変わるようになり、ミサイルや破壊砲を身につけた。Kはマザーの死を乗り越え、バドーとの決戦に臨む。

【クレジット】

監督 奥中惇夫

内田一作

折田至

企画 別所孝治

(フジテレビ)

平山亨

斉藤侑

原作 石森章太郎

脚本 伊上勝

中山昌一

上原正三

撮影 篠原征夫

(プロダクション・ショット)

古市勝嗣

特撮 内田一作

堀江毅

星野行彦

	木村公明	
	秋田富士夫	
	江田徳	
美術	山口熙	(エキスポロ)
	高橋洋一	
編集	菅野順吉	
音楽	菊池俊輔	
アクション	三角修	(J. A. C.)
	金田治	(J. A. C.)
	山岡淳二	(J. A. C.)
	酒井努	(J. A. C.)
技斗	風間健	
	三角修	
アクション	春田三三夫	
助監督	平山公夫	
	萩谷泰夫	
ナレーター	野田圭一	
出演	千葉治郎	新條強
	千葉真一	Shinichi Chiba 新條敬太郎 (強の兄)
	高品格	芝大造
	紅景子	芝奈美
	加賀由美子	芝由美
	三上左京	地獄耳平 (情報屋)
	夏夕子	霧島サオリ (霧島博士の娘)
	富川徹夫	霧島ジョージ (サオリの弟)
	伊吹聡太郎	
	吉原正皓	
	北九州男	
	山本武	
声の出演	矢田耕司	
	川久保潔	バドーの声
	仲村秀生	ロボット刑事の声
	中島律	